

## コリント人への手紙第二

### コリント人への手紙について

いま私たちが見ている聖書(正典:公式に信者が従うべき基準として確立されている文書)には、パウロがコリントに送った手紙は、第一と第二の2巻です。しかし、コリント人の手紙第一と第二の内容を見ると、手紙第一の前に1つ、第二の前に1つ、手紙を書いていることが分かります。

#### Iコリント 5:9

わたし まえ おく てがみ ふひんこう もの こうさい  
私は前にあなたがたに送った手紙で、不品行な者たちと交際しないようにと書きました。

おく てがみ かこけい か てがみだいいち おく まえ か  
「送った手紙」と過去形で書いてるので、手紙第一を送る前に1つ書いたということでしょう。

#### IIコリント 2:3-4

3 あのような手紙を書いたのは、私が行くときには、私に喜びを与えてくれるはずの人たちから悲しみを与えられたくないからでした。それは、私の喜びがあなたがたすべての喜びであることを、あなたがたすべてについて確信しているからです。  
4 私は大きな苦しみと心の嘆きから、涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました。それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。

手紙第二にも、「書いた」「書きました」と過去形で言っています。これも手紙第二を書く前に、1つ手紙を送っているということでしょう。

しかし、いまは第一第二以外の2つの手紙は残っていません。それは、必要がないので神様が残されていないということでしょう。

しんやくせいしょ 新約聖書で、パウロの書簡(手紙)は、13巻か14巻だと言われています。その書簡の中で、いちばん長い手紙が「コリント人への手紙第一、第二」です。コリント人への手紙第一は16章あり、第二は13章あります。いま私たちが見ているコリント人の手紙以外に、まだ他にコリント人への手紙があったということは、それほど、内容があるということです。すべてが含まれていたら、新約聖書の中で一番長い内容になっていたでしょう。



それは、使徒パウロのコリントの人々に対する愛が、それほど大きかったということです。上で見たIIコリント2:4の最後にも「それは、あなたがたを悲しませるためではなく、私があなたがたに対して抱いている、あふれるばかりの愛を知っていただきたいからでした。」あなたがたに、愛の手紙をこのように長く書いているということです。

せんしゅう がくいんふくいんか か かた かみさま おお あい とお ほか ひと つた  
先週の学院福音化の4課で語ったように、神様の大きなあふれるばかりの愛が、パウロを通して他の人たちに伝えられているということです。「神の愛」と「隣人の愛」は、同じことだと見ました。神様を愛する結果が隣人を愛することで現れ、隣人を愛する結果が神様を愛することとして現れるのです。(先月のメッセージを参考にしてください)

# 第一課 伝道者を助ける方法

## フォーラムの主題：「苦しみと祈り」

### IIコリント 1:11

あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してください。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。



#### 1. 苦しみ（苦難）について

パウロの働きを話すときに、必ず出て来るのが「苦しみ（苦難）」です。

### IIコリ 1:8-9

8 兄弟たちよ。私たちがアヤジで会った苦しみについて、ぜひ知っておいてください。私たちは、非常に激しい、耐えられないほどの圧迫を受け、ついにいのちさえも危くなり、  
9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

まるで、神様が殺すことを決断されたかのようで、生きる希望さえなくなったと言っています。どんな苦しみを受けたのか、その内容はIIコリント 11:23-28にあります。

### IIコリント 11:23-28

23 彼らはキリストのしもべですか。私は狂気したように言いますが、私は彼ら以上にそうなのです。私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。  
24 ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、  
25 むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。  
26 幾度も旅をし、川の難、盜賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難に会い、  
27 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともあります。  
28 このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。

すごいですね。これほどまでの苦しみにあったのです。

みなさんは、これほどの苦しみにあったら、どうでしょう。

「もう私はできない」「もうできないから、やめる」と言うのではないでしょうか。

神様は、なぜこのような苦しみを与えられたのでしょうか。パウロがこのような苦しみを通して、なにを告白したのかを見ましょう。

#### ① 慰めの神がほめたたえられますように

### IIコリント 1:3-4a

3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。  
4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。

ここで、「慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように」とパウロは書いています。

みなさん、考えてみてください。

「慰め」というのは、受けている苦しみや問題よりも大きくなければ「慰め」にならないでしょう。

たとえば・・・

先生の末の息子が、自分のさいふの中にお金を入れて、スーパーに買い物に行きました。500円玉1つ、100円玉1つ、合計600円を入れて行きました。歩いて行くのに、楽しくて、さいふを振り回しながら行きました。ところが、さいふの口があいていたのです。振り回していたので、お金が飛んで行って、なくなってしまいました。お金がなくなったのが分かって、ものすごく落ち込んで帰ってきました。その息子の上の子が、慰めてあげると、自分が持っている200円を渡しました。しかし、お金をなくした子は、ちっとも喜べないです。なくしたのは600円なのに、もらったのは200円なので。

そのように、子どもたちが失敗したり、苦しいときに、お母さんがお尻をポンポンとたたいて、「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と言っても、ほんとうの慰めにはなりません。大きい子なら、ゲームを長時間したり、カラオケに行って大声で歌ったりして、ストレスを発散するでしょうが、その程度では、慰めにはならないでしょう。

パウロが「慰め」というのは、そのようなものではありません。

何度も「自分の心の中で死を覚悟」するほどの苦しみにあったのです。そこに対する慰めは、どのようなものでしょうか。Ⅱコリント1:5を見てみましょう。

5 それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。



苦しみと慰めの話をしていたパウロが、急に「キリストの苦難」について話します。キリストの苦難とは、イエス様の十字架と死と復活についてです。死を通して死に打ち勝ち復活されたキリスト。それによって、永遠のいのちと、永遠の神の国の希望を与えてくださったので、そこから感謝と賛美があふれたのです。

## ②他の人に慰めを伝える

また、そのような神様の慰めを先に味わっていたからこそ、他の人が受けている苦しみに対しても、慰めを伝えることができたということです。

Ⅱコリント1:4b、6-7

4b こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができます。

6 もし私たちが苦しみに会うなら、それはあなたがたの慰めと救いのためです。もし私たちが慰めを受けるなら、それもあなたがたの慰めのためで、その慰めは、私たちが受けている苦難と同じ苦難に耐え抜く力をあなたがたに与えるのです。

7 私たちがあなたがたについて抱いている望みは、動くことがありません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めをもともにしていることを、私たちは知っているからです。

さきに、苦しみを通して神様の慰めを受けていたパウロは、他の人の苦しみにも神様の慰めがあることを確信していました。

### ③靈的な意味

靈的な意味でも見てみましょう。

救われる前の苦しみと、そのあの苦しみとは、どのような差があるのでしょうか。

救われる前（未信者状態）の苦しみは、福音を知らないことです。  
救いはイエス様が私の人生の主人となることです。しかし、救われる前は、私の人生の主人として私が生きようとするので、生きること自体が苦しみになるしかありません。被造物である私が、神様のように生きようとするので、どれほど苦しいでしょうか。すべての善惡を判断しようとすることが、どれほど苦しいでしょうか。生きること自体が苦しみです。



それでは、救われた以降の苦しみはどうでしょうか。同じです。救われても、依然として自分が人生の主体者として生きようとしています。  
しかし、違う点は、キリストの靈である聖靈が私の中に入つて来られ、限りなく私の自我を消そうとしてくださっているのですが、それが私たちに苦しみとして来るということです。

みなさん、自分の自我が否定され、それを削られるほど、つらい苦しみはないでしょう。  
創世記3章のアダム以降、すべての人たちは、自分が主人で、自分中心に生きようとします。そのような自分が削除され、否定されることに耐えることができる人はいません。それゆえ、イエス様は「わたしについて来なさい」と言られたとき、「自分を捨て、自分の十字架を負って」について来なさいと言られたのでしょう。

ルカ9:23

イエスは、みなの者に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。

このルカの福音書の内容は、マタイ、マルコの福音書にもありますが、ルカの福音書にだけ「日々」（毎日）ということばがあります。パウロの告白のように、私たちは「毎日」死んで「毎日」生きるべきだということです。

このように「自分を捨て、日々自分の十字架を負い、主について行く」ことについて、次のように書いてあります。

マタイ11:29

わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。

イエス様がこの地で背負われた「くびき」の最後は「十字架」でした。そこにまことの安らぎがあるのです。ですから、死んでこそ生きるのです。



それを知っていたパウロは、テモテに次のように書きました。

Ⅱ テモテ2:3

キリスト・イエスのりっぱな兵士として、私と苦しみをともにしてください。

また、使徒ヨハネは、黙示録に次のように書いています。

黙1:9

私ヨハネは、あなたがたの兄弟であり、あなたがたとともにイエスにある苦難と御国と忍耐とにあづかっている者であって、神のことばとイエスのあかしとのゆえに、パトモスという島にいた。

ですから、苦しみ（苦難）は、信徒には必ずあるものであって、それは祝福なのです。

## IIコリント 1:9-10

9 ほんとうに、自分の心の中で死を覚悟しました。これは、もはや自分自身を頼まず、死者をよみがえらせてくださる神により頼む者となるためでした。

10 ところが神は、これほどの大好きな死の危険から、私たちを救い出してくださいました。また将来も救い出してくださいます。なおも救い出してくださるという望みを、私たちはこの神に置いているのです。

くる 苦しみを通して私たちは、もっと「神様により頼む」べきです。どんな状況であっても、ただ神様だけに希望を持ちましょう。

## 2. 祈り

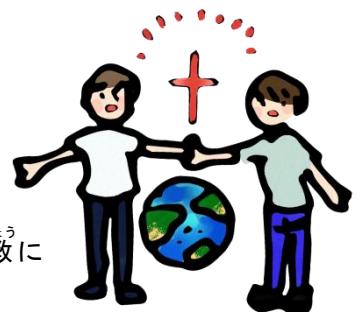
### IIコリント 1:11を見ましょう。

あなたがたも祈りによって、私たちを助けて協力してくださるでしょう。それは、多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。

パウロは、祈りを頼んでいるのと同時に、その理由についても書いています。

#### ①それが伝道者を助けていることです

とりなしの祈りをすることが、ともに伝道と宣教、永遠の救いの働きをしていることです。  
私たちが送る宣教師があり、行く宣教師があります。現場を回りながら働きをする人、いる場所で祈って働きをする人がいます。どちらも、同じように伝道と宣教に用いられているのです。



### コロサイ 4:3

同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるよう、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。

伝道の門が開かれるように祈ってくださいと言っています。

#### ②「多くの人々の祈りにより私たちに与えられた恵みについて、多くの人々が感謝をささげるようになるためです。」

多くの人々の祈りによって私が神様から恵みを受け、そのようにして受けた恵みが多くの人々に伝わるので、また、神様に感謝をささげるということです。

パウロと私たちにとって、いちばん大きな恵みはなんでしょうか。もちろん、救われて永遠の天国に入ることは、大きな恵みでしょう。しかし、それは創造の前から予定されていたことです。この地を生きる間は、福音を語ること、伝達することがいちばん大きな恵みでしょう。永遠のいのちに定められた別の人々が、私を通して、主の前に立ち返ること、それこそが、神様の愛であり、隣人への愛です。

初代教会の人々の祈りを見てみましょう。

### 使徒4:29-31

29 主よ。いま彼らの脅かしをご覧になり、あなたのしもべたちにみことばを大胆に語らせてください。

30 御手を伸ばしていやしを行なわせ、あなたの聖なるしもベイエスの御名によって、しるしと不思議なわざを行なわせてください。」

31 彼らがこう祈ると、その集まっていた場所が震い動き、一同は聖霊に満たされ、神のことばを大胆に語りだした。

大胆に神様のみことばを語るために、聖霊の満たしを求める祈りをしたのです。みなさんも、祈るとき、「大胆に神様のみことばを語るため、また、そのために聖霊に満たされるように」と祈りましょう。

最後に聖書1か所を見ましょう。

創世記19:29

こうして、神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からのがれさせた。

アブラハムは、ソドムとゴモラを滅ぼされるという話を聞いたときに、神様に祈って5回も神様のみこころを動かしました。「その中にいる五十人の正しい者のために、その町をお赦しにはならないですか。」「四十五人では」「四十人では」「三十人」「二十人」「十人」と、5回神様のみこころを動かしたのです。しかし、結局、正しい者十人がいらず、ソドムとゴモラは滅ぼされます。そのように滅ぼされたとき「神はアブラハムを覚えておられた」つまり、アブラハムの祈りを覚えておられたのです。

みなさん、伝道者のために、みんなの教会の牧師先生のために、宣教師先生のために祈ってください。

みんなの祈りを覚えて、そこに神様の大きな驚くべき恵みの働きが起こるでしょう。



### <祈り>

全能なる神様に感謝します。私たちの苦しみは、問題や呪いではなく、祝福であることを見ました。苦しみを通して神様の慰めをもっと受け、神様にもっとより頼み、神様に希望を持つことを願います。患難の中でも、私たちを生かしてくださったことに感謝して、伝道者のため、現場のためにとりなしの祈りをする中で、この国に、この民族に、多くの所に神の国がもっと臨みますように。イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン